



大阪商業大学
FD ニュースレター

第4号

2009年5月発行

《第1回 FD 研修会》

初年次教育の動向と評価

2009年3月18日

於：大阪商業大学 本館6階 大会議室

講師：同志社大学 教育開発センター所長・社会学部教授

山田礼子

◎司会(前田啓一・FD 委員会委員長／経済学部教授) 午後の忙しい時間帯にお集まりくださりましてありがとうございます。今日は同志社大学の山田礼子先生に「FD 委員会」のご講演をお願いしております。

私ども FD 委員会では、自己点検・評価報告書の作成、学生への授業アンケートの実施、FD ニュースレターの発行、そして公開授業も実施してきておりますが、今日はさらに第1回目の研修会ということで大変楽しみにしております。FD 活動の具体的な内容、あるいは初年次教育の中身については、私どもも戸惑っております、本日は貴重なご示唆を承ることができると存じます。

まずは片山隆男先生から、ご挨拶をお願いします。

○片山隆男副学長 いま、前田先生からお話がありましたように、今日は同志社大学の山田先生をお迎えいたしまして、FD 研修会を開催したいと思います。

先ほどの基礎演習の集まりに来ておられた先生方は驚かれたように、卒業に必要な単位数124のうち、1年生の段階でかなり取れるはずなのですが、実際はそれの半分以下であるという学生も増加する傾向にあります。そして、それがずっと持ちあがっていくとか、そのまま残って、留年する危険性がかなりの数の学生に見え隠れしているわけです。

そこで、初年次教育というものをどういうふうにやっていくかが、非常に大事な点であります。山田先生は、本学の学長ともお仕事を一緒にされた方です。このなかにも、先生をよくご存じの方もいらっしゃると思います。話も聴かれたことがあるかも知りません。この方面のご専門家で、有名な方でございます。今日はその先生のお話を聴いていただきながら、われわれ自身が初年次教育をどのように考え、それにいかに取り組んでいくか。こういう道を探ってまいりたいと思います。

先生は、大変お忙しいところ、おいでいただきましてありがとうございます。それでは、どうぞよろしく願いいたします。

◎司会 今日の進め方なのですが、いまから1時間程度お話を頂戴いたしまして、そののち15～20分程度の質問とディスカッションをさせていただきたい、このようなかたちで考えております。それでは、山田先生、よろしくをお願いします。

●山田 ただいまご紹介いただきました、同志社大学の山田でございます。今日は、こういう機会をお与えいただきまして、大変ありがたく思っております。

では、パワーポイントで説明させていただきますので、座らせていただきたいと思います。よろしく願いいたします。

【パワーポイント1ー表紙】

今日のタイトルは「初年次教育の動向と評価」です。どちらかというと、非常にマクロなお話にさせていただきたいと思いますが、質疑応答などで、実際の初年次教育の方法などについて、たとえば小規模大学ではどのような方法を行なっているのか、大規模大学ではどのような動向があるのか、そういうミクロなご質問があれば、質疑応答のなかで明らかにしていきたいと思っております。どうかよろしく願いいたします。

【パワーポイント2ー初年次教育の普及とその背景】

さて、初年次教育、それこそ本当に今日のお話も、先ほど副学長のお話をうかがいまして、初年次教育について、こちらの大学でも「基礎演習」ということで、大事にされているということをお伺いいたしました。

実は初年次教育は、あとで説明いたしますけれども、1990年代から日本で始まってきたものではなくて、2000年ぐらいから急激な勢いで広がっております。あとでデータをお見せしたら、驚かれる方もおられるかもしれませんが、本家本元のアメリカを凌駕するような勢いで、日本のなかで広がってきています。

その広がり背景といたしまして、ここに書いているように、学生の変容というのが非常に大きいと思います。言い換えれば、よくお聞きになる言葉である、「大学のユニバーサル化」ということです。2008年には、高等教育への進学率が55%超に上昇してしまいました。これは、55%といたったときに、非常に地域的なバランスが違っておりますので、たとえば首都圏や近畿地方の大都市圏におきましては、もっと進学率が上がってまいります。ここにおられる先生方の年齢もバラバラであるかと思っておりますけれども、おそらく先輩の先生方が大学に行かれた時代には、20%弱の進学率であった。その頃と比べますと、学生が変容している。その学生の変容として、一般的に言われるのは学力の問題です。実は学力の問題以上に大きいのは、やはり学生の意識が非常に変わってきていることです。つまり、進学をすることに対して、ほとんど意識がない。進学率20%時代の学生さんであれば、大学に行くということで、中等教育と高等教育が違う、そこで覚悟をして、というようなことがあったのですけれども、いまはもうほとんどそういうことがなくなっている。とりわけ、進学校に至りましては100%、皆さんが進学してしまいますから、通過儀礼にしかならないというようなこともあります。

また、学生の変容のなかで、こちらの大学でもたぶんそうだと思うのですが、2006年問題というのも、たぶん顕著になってきているかと思っております。2006年度生が現役で入ってきたとしたら、今年から4年生になると思います。私自身はこの2、3年、初年次教育であります「ファーストイヤー・セミナー」を担当しなかったため、2006年度生が初めてゼミに入ってきた昨年、3年生のときに、ずいぶんこれまでの学生と変わったなと感じました。その変わり方というのは、実は学力ということではありません。非常に活発に皆

さん、発言をするのですけれども、その発言の仕方やコミュニケーションが一方的で、学生同士の間でのコミュニケーションも、教員とのコミュニケーションも、成り立たなくなりがちなケースが増えてまいりました。それまでの学生さんの場合は、2005年度までを境として、2005年と2006年を見たときに、学力面でどう違うかは私にはわからないのですけれども、まず話をあまり聞かない。非常に一方的なプレゼンテーションになったり、お互いに質問をしたとしても、感情的になったりとかということが、ちょっと目立つようになりました。このあたりはおそらく、何年間かのあいだの、文科省の「ゆとり教育」のなかで、非常に個性を大事にしたということが言われていましたから、その個性を、本当の意味での個性を大事にするようなかたちで教育を受けていれば、そんなことはないのでしょうかけれども、間違ったかたちで教育を受けていた場合、一方的なコミュニケーションで突っ走ってくるような学生も、しばしばいる。これからも増えてくるのではないかと思います。

さて、そういうなかで、政策的側面の変化というのは、もう当たり前のように、大学がより教育を重視する場へと変革させるような政策の存在であります。これは、競争的資金で表わされますように、本来、大学には基盤補助費が入ってくれば、一番よろしいのですけれども、そうではなくて、教育に関しても競争的資金で、GPなどに代表されるようなかたちで、資金を取るようになってきています。そういう政策の影響が非常に大きいと言えるかと思えます。

もう1つは、初年次教育は、2008年の審議のまとめ、これは実際に12月に中教審の答申となりましたけれども、そのなかでわざわざ、不可欠な1年次のプログラムであるというように、言及されています。つまり言い換えれば、初年次教育は、いままでの教養教育あるいは共通教育という枠組み以上に、初年次教育として独立して、あるいは初年次のプログラムというかたちで、カリキュラムのなかに入れていくことが一般的になりつつあるということになります。

もう1つは、社会から求められる教育効果の提示ということです。アウトカム評価の導入への動きもいま、非常に盛んになっております。このあたりは、またあとで、ご説明させていただきたいと思えます。

【パワーポイント3－初年次教育の現状は？】

しかし、そういうなかでも、初年次教育の概念が日本では、それほど整理されていないという現状も残っています。言い換えれば、初年次教育が実際に非常に普及しているにも関わらず、逆に初年次教育そのものが多様化してきているということもあります。

たとえば、リメディアル教育も初年次教育の一環であるというように見ているところもあるでしょうし、そうではないところもたくさんございます。私どもが設立いたしました「初年次教育学会」では、リメディアル教育は、あくまでも教科の欠けている部分を補充するという教育でありまして、初年次教育のなかには入れておりません。

ただし、分野によっては、この初年次教育の概念のなかにはじつはリメディアル的要素が入ってくる分野も、当然、ございます。たとえば理工系です。こちらの場合は、やはり高校からのカリキュラムと、そして大学でのカリキュラムに接続があって、そしてそれを1つ1つこなしていないと次に進めませんので、当然ながら、リメディアル的要素は入ってまいります。ただ、それを初年次教育とするのか、あるいは補習として別にするのかで、全然、学生の対応は違ってきます。また、コストの面でも、アメリカなどでは、リメディアルとして設置してしまいますと、非常にコストがかかるという問題もございます。

そのように、実際に概念が整理されていない現状がありますので、教員の認識もさまざまであるということです。

いま申しあげたように、補習教育も包摂しているような場合もあるということです。

次に、やはり内容をみると、たとえばスキルだけに特化したような初年次教育もあるかと思えます。あとでデータをお見せいたします。それから、モチベーションを上げるようにする、あるいは大学での居場所づくりとして、初年次教育を使っている大学などもあります。そのなかで、どうした内容が教育上、効果的であるかというのは、実際のところ、まだまだ不透明であって、今後そういうデータを検証しながら、いかなければならない状態であるのも事実です。

【パワーポイント4－初年次教育の意味と意義】

さて、もう1つ大事なことは、初年次教育の意味と意義ということです。

まず、先ほど中教審の答申のなかで、学士課程教育の一環として位置づけられるように、とされています。それが実際に、今後、必要になってまいります。もう1つ大事なことは、2年次、3年次、4年次との継続性であります。

実は日本で、あとで申しあげますように、非常にこの数年間のあいだで、初年次教育は普及してきておりますから、各大学の担当者、あるいは大学が、初年次教育に期待する度合いが高くなってきています。しかし、初年次教育はあくまでも通過儀礼として、私は受けとめていただきたい部分でございまして、それだけでは全然、問題は解決いたしません。むしろ、最初のステップでしかなくて、その後は2年次、3年次、4年次に継続していくということが必要でございまして。

次に、日本の大学の特性に合った初年次教育というのが非常に重要です。私は、初年次教育を最初、研究から入りました。というのも、実は自分の母校であります同志社に戻る前に、新設大学に4年間赴任していたのですが、この大学は実は、当時の学長先生に先見の明があったと思うのですけれども、1996年のこと、新設にあたって、ご自分がイギリスの大学で副学長をされていたときに、カリキュラムのなかに入れておられた、新生を円滑に大学教育に転換させていくような科目として、「自己の実現」という科目を開設されたのです。これは必修科目でございまして、それに心理学、教育学、文化人類学の教員があたりまして、同じ内容で教えるということが求められました。こんな科目は聞いたこともなかったもので、いったいどうやってやるのだろうと、みんなで研究会を

つくりましたが、さっぱりわかりませんでした。1年目は、本当に何がなんだかわからないままでいきました。2年目は、これだったらもうスタディ・スキルだけでいこうということで、レポートの書き方やプレゼンテーションの仕方、そういうところに特化しました。そうしても、なかなかうまくいかなかった。やはりスキルだけに特化していると、学生が途中で飽きてきたりします。また、必修にしましたから、どんどん必修科目を取れない学生なども出てまいります。それで、これはどのようにして運営していったらよいのかということで、まず海外にヒントがあるのではないかと考えて、研究会のなかで探していきましたところ、サウスカロライナ大学に、「ファーストイヤー・エキスペリエンス・アンド・トランジション」というセンターがございました。ここはいわゆる初年次教育の全米の研究センターでした。そこではじめて、初年次教育、「ファーストイヤー・セミナー」、当時は「フレッシュマン・セミナー」といっておりましたが、あるいは「ファーストイヤー・エキスペリエンス」という言葉を知りました。みんなで、それをどんどん調べていきましたときに、これは必ずしもスキルではない、と。やはり転換期を支援するための教育で、たとえば居場所づくりがそのなかに入っていたり、建学の精神や理念などを教えていたり、そういうことがわかってきました。それで、それを取り入れたのですけれども、その頃はまだ、よくわからなかったのですね。

今度、同志社に移ってきたときに、さて、こういう効果的な教育であれば、同志社でも行なっていこうと思って、自分の所属している教育文化学科のなかの「教育学基礎演習」というのがありまして、これをアメリカ式の「ファーストイヤー・セミナー」に変えました。

そうしたときに、はたと気づきました。つまり、この科目はアメリカでは、非常に普遍的な内容だった。どうしてそうだったのか。普遍的な内容というのは、そこには専門性が全然入っていなかったということです。「あれっ」と思ったときに、はたと気づいたのは、アメリカの大学というのはよく考えてみると、1年生が入学してきたときに、学部あるいはデパートメントに所属しないということがわかったのです。「カレッジ・オブ・レターズ・アンド・サイエンス」に入ってくるので、非常に大きな単位に入ります。そうすると学生たちは、ほとんどお互いを知らないんですね。知らないなかで、帰属場所、コミュニティーがございませんから、まずコミュニティーに属することが大切になってきます。

そういうところと比べて、うちの教育文化学科とはいったいどんなものかということ、せいぜい学生数が、定員が60人ぐらいですから、70人、多くて80人弱になります。そうすると、2クラス、3クラス置くと、ほとんどみんな互いに知っていますので、当然ながら、早くから専門ということ意識した教育もできることに気づいたのです。

これがおそらく、日本の大学の特性だと思います。レイト・ディンジョンというのがアメリカであれば、日本の場合は、アーリー・ディンジョンです。このアーリー・ディンジョンについて、文科省などの何かで読みますと、教養教育をどうしていくかが大事になっていますけれども、組み換えるということは、大変むずかしい部分が残っています。ですから、日本ではこれを利用して、アーリー・ディンジョンに合うようなかたちで、専門性をそのなかに入れていくことも大切かなということになります。

次に、もう1つ大切なのは、オリジナルな初年次教育というものが日本であったとして、次には自分の大学に合うような、オリジナルな初年次教育が大切であります。建学の精神や、学生の特性、学生文化であります。これは、たとえば大阪商業大学の学生の像と、よく似た大学を比較するとしたらどこがよろしいでしょうか。

一(会場から) 近畿大学。ちょっと規模が大きいですが。

じゃあ、たとえば大阪商業大学の学生文化、あるいは学生の特性と、近畿大学の学生の特性、学生文化が似ていたとしましょう。しかしながら、もしかすると、学生調査などでデータを取っていくと、まったく違ったものが出てくるかもしれません。つまり、言い換えれば、それぞれの大学の風土とか、学生のデータに合わせたかたちで、オリジナルな初年次教育をつくっていくことも必要になってきます。そこで、いわゆるデータと合わせた初年次教育というものが必要になってきます。

もう1つ大事なのは、建学の精神です。これは、私学にとっちはばん利点でもございますし、これを利用しない手はない。国立大学などでは、ここで苦労しています。初年次教育は、たとえば全学の共通教育センターなどで提供している場合、全学出動体制になっていて、理系の先生、あるいは文系の先生、社会科学系の先生、語学の先生などが、初年次教育という、ファーストイヤー・セミナーなどを担当する。それは、いい意味で言えば、全学の学問への導入みたいなことは総合的な演習というかたちでできますけれども、そこに建学の精神である科目や内容をうまく組み合わせることはむずかしい。そのあたりが、私学であればこそできるということでありましょうか。

【パワーポイント5-日米比較の意味】

さて、あとはちょっと違うところなのですけれども。私は、研究からまいりましたので、もともと日本とアメリカの高等教育の研究が、私の研究領域でございますので、どうしても日米比較ということをしてしまいます。

しかし、日米の比較の意味というのも、やはりあります。日米の文化的、社会的背景の差と共通点を見ることができる。高等教育構造の差異についての認識。これは先ほど申しあげましたように、日米の高等教育には、全然違う構造があるということです。

そして、またその直面している問題構造の違いもある。しかし、そこから共通点が認識できることもある。また、アメリカのほうが日本より早くにユニバーサル化を経験しておりますので、初年次教育を導入してきた時期が非常に早くなります。そうした経験から応用できる部分も確認できるということが、意味があるかなと考えている次第です。

【パワーポイント6ー重要な学士課程教育の取り組み アメリカでの評価事例】

そこで、重要な学士課程教育の取り組みということで、アメリカの評価事例を1点、ご紹介したいと思います。

西部地区基準協会(WASC/ワスク)は、UC バークレーという研究大学の学士課程教育が再認証されるに当たっての意見を出しております。これは2003年10月に実施されて、2004年に再認証がされました。これが一番新しいところだろうと思います。そのときの訪問調査の結果から見ると、何が UC バークレーのような研究大学で評価されたか。大規模大学におけるフレッシュマン・セミナーが導入されたことが、評価されています。言い換えれば、UC バークレーのような研究大学であっても、ファーストイヤー・セミナーを導入するということが、いまや評価されるようになっている。

次もそうなのですが、サービスマーケティングの導入。いわゆる体験的な学習を通じて学ぶという方法です。これなども、評価されました。

それから大規模教室での教授法改善の試みなど、従来であれば、研究大学であれば、こういうことはそれほど評価されなかったのですが、それが評価されるようになってきているということがみえると思います。

【パワーポイント7ー学士課程教育で改善すべき具体的事項】

一方で、改善すべき事項としては、まず研究大学でありますから、UC バークレーなどでは、それまでは、いまでもそうだといいところは否定できませんけれども、研究と大学院教育を重視しています。しかし、「大学の核となるべき学士課程教育に注目し、最優先課題とすること」ということが、改善すべき具体的事項として意見が出されております。

次に、学生の学習について、ベンチマークを設定して、教養教育の成果、あるいは学習のプロセスを測定することが期待されるということまでも、言われているわけです。

それから、学生の学習成果を社会に対して目に見えるように公開することを促進すべきであるという注意事項もついています。

【パワーポイント8ー評価結果からの示唆】

言い換えれば、アメリカの研究型大学でも、学士課程教育の重要性が指摘されるようになってきている。初年次教育、体験型学習の導入も、より普遍的になり、成果が求められるようになってきていると言えるわけでございます。

これはおそらく、日本にとっても合わせ鏡として見ていくべき点であります。アメリカでもこうなってくるということは、日本でもすでに始まっているのですけれども早々に、成果を社会に見えるようにしていかなければならないということが、より求められるようになってきているということになると思います。

【パワーポイント9ー2001年度全国私立大学学部長調査:初年次教育の必要性】

さて、それでは、全国的なデータで2001年をご紹介します。

2001年に全国の私立大学の学部長調査を実施したときにも、初年次教育の必要性について、すでに94%近くが必要と認識されております。ここに掲げている必要とする理由(◇学力低下・学力格差の拡大◇進学のための意識・動機づけの欠如◇大学生活への不適応)などは、いまとほとんど変わりはないと言えます。2001年にすでに、多くの私立大学では、初年次教育を導入しなければならないような背景が顕著になってきていたといえるかと思えます。

また、大学生活への不適応(不登校・留年・中退)。これは、おそらくこちらの大学でも、もしかすると現在でも大きな課題かもしれませんし、今後もこれは、もっと顕著になっていくと思います。ただ、2001年でも、それはすでに現われていました。この時点では、じつは私立大学連盟や私立大学協会などでも、あまり中退率のはっきりしたデータを取っておりませんでした。しかし、この時点で私どもの私立大学のなかで、中退率は10%ぐらい出ていたんですね。ですから、大学によってすでに、1年生から2年生に行く段階で中退してしまう、あるいは姿を消してしまうと言いますか、来ないままに、そのまま溜まって行って、最終的には退学してしまうということも、大学の偏差値によっては明らかになっておりました。

そのために、いったいどうしていくかということで、初年次教育なども、ある一部の大学などでは大事だといわれていたと思います。

【パワーポイント10ー教育プログラムの実際】

教育プログラムの実際なのですけれども、2001年の段階で授業として実施しているところが84.3%。授業以外として実施しているところは、オリエンテーションやガイダンスなどがございました。両方実施しているところが約66.7%ありました。

【パワーポイント11ー初年次教育の科目名称】

ただ、科目名称の実態というのが日本的なのですけれども、ゼミナール型、基礎・概論型、情報リテラシー型が中心であります。

アメリカでいう、あるいは現在のようなオリエンテーション型を含んだ、ファーストイヤー・セミナー型は少数でありました。言い換えれば専門基礎的な側面が非常に強かった。これは日本の大学の特徴を表わしております。

ただし、ゼミナール型、基礎・概論型というところに、大きな抜け穴がございまして、基礎・概論型は、それこそ大きな大学でいえば、800人のそういう概論を初年次教育と言っているんですね。実は、ここは大間違いでございまして、初年次教育の大きな特徴は少人数ゼミナールです。ですから、最大規模で20人ぐらい。余裕があれば、15~20人のあいだでクラスをつくりあげていけば、いちばんいい。そういうことは意識せずに、基礎・概論を当時は、初年次教育と言っていたということになります。

【パワーポイント 12—科目類型の分布(入学難易度別)】

こちらは、科目類型の分布を入学難易度別に見ていったところでもあります。これを見て言えることは、難易度の低い学部、たとえば偏差値 40 未満。これはフリーランクです。そういうところはゼミナール型がたいへん多い。次に多いのが補習教育ではなくて、情報リテラシー型になっています。一方で偏差値が高くなると、ゼミナール型が少なく、基礎・概論型でごまかすというような傾向が見えてきた次第です。

つまり、すでに 2001 年の時点でも、少人数教育の特徴であるゼミナール型で初年次教育を行っていたところは、偏差値が下位のところ。40 以上 44 未満、あるいは 40 未満のところが多かったということが言えるわけでございます。

【パワーポイント 13—初年次教育の評価】

さて、初年次教育の評価といたしまして、実施しているうち 85%が、なんらかのかたちで教育効果を実感しています。87.6%が、増強すべきであると回答しているというように、主観的だったかもしれませんが、初年次教育の効果ということをはとんどの実施校が感じていたということをご紹介させていただきます。

【パワーポイント 14—2007 年度初年次教育調査】

さて、2001 年の調査では、全私立大学のみを対象にいたしました。なぜ、2001 年に私立大学であったかということ、当時、考えてみますと、大衆化は私立大学にまず来ていたのです。国立大学のほうは、事前に調査をしたときに、「初年次教育などまったく必要ない」と回答したところが多かったので、省略させていただきました。

それから6年たった 2007 年 12 月。1年ぐらい前に、今度は、同じ私どもの研究グループと国立教育政策研究所と一緒に、全ての国公私立大学、全学部を対象に、同じような調査を実施いたしました。これは、1,378 学部から回答をいただきました。70%近い回収率なので、わりといいデータを取れたと思っています。

【パワーポイント 15—2001 年度と 2007 年度の比較】

ここで、どれだけの変化があったかをご紹介します。

2001 年の場合は理系、社会科学系学部でやや多いということがありました。なぜ 2001 年に、私学において理系と社会系で多かったか。

そのあと訪問調査を行ない、あるいはいろいろと初年次教育のシラバスなどを手に入れまして調べた部分を反映させますと、理系は先ほど申しあげたように、補習教育的な部分が強いということがあります。つまり、次に進めないのが、初年次教育のなかにちょっと補習教育的要素を入れていたということがあります。しかし、社会科学系というのは、経済、商学、法学、経営、それから社会学、それにプラス政策系が入ってまいります、大学内の問題が、連携の部分といいますか、ここに噴出しているのですね。

つまり、高校の進路指導の際に、早くから自分はこういうことを学びたいと決まっていれば問題はないのですけれども、多くはやはり高校のときになかなか決まりません。また、その偏差値で、高校の先生たちが進路指導をするということが、いまでも残っています。そうしたときに、偏差値でまず切っていきます。次に、まだやりたいことが決まっていなければ、とりあえず就職の良いと思われる、経済、経営、商学系に行きなさいと勧めます。

しかし、実際に入学してみたところ、たとえば経済学部であれば、絶対に数学が必要になってまいります。もちろん、数学なしでというコースもなんとかできるのかもしれませんが、基本的に近代経済学になってくると数学が要る。しかし数学を学ばずに来た学生が、ここで引っかかります。また、経済学という学問は、経営などに比べますと伝統的な学問ですから、しっかりと体系ができあがっておりますので、当然ながら、そこで新しくすぐに組み換えていくことは難しいかもしれません。そこで、学生がつまずいてしまうということが起こってまいります。

また同じように、法学部に入っても、法学部の授業というのは、これまた本当にはっきりと決まっておりますし、大規模教室で行なわれますから、学生がつまずく度合いが高い。そこで、退学率あるいは溜まっていく率が、ここに多くなっております。そういう意味で、ここが高かったということが言えます。

一方で、人文系などは、どちらかというと、最初から就職ということは考えずに、自分はこういうところが好きだから文学部に進むとかいうようになってまいります。どちらかというとミスマッチが起こりにくいということがあります。そういう状況だったのです。

それが、2007 年には、それに関係なくすべて、人文系、社会科学系、理系、その他を合わせて、97%というように、初年次教育の実施率がさらに拡大してきました。

初年次教育は第2ステージに入ったものと、私ども初年次教育学会の関係者は見ております。

【パワーポイント 16—初年次教育の領域】

そこで、では 2007 年度では、初年次教育の領域がだいたいどのように整理されるか。

これはいろいろな組合せがございます。大学によっては1つだけに特化しているところもあるし、組合せなどで行なわれているところも多いかと思えます。

たとえば同志社大学の場合を先に事例として申しあげます。私どもは初年次教育を 2004 年から全学部のなかで普遍化しているということで、行なってまいりました。学部のなかで、その専門に合わせて中身を料理していただいております。ただし、モデル案

というものをしています。そうしてみますと、必ずスタディ・スキル系は入ってきますし、専門教育への導入、あるいは情報リテラシー、キャリアデザインなど…、そして自校教育などが入ってきます。ただし、それは学部によって、重点化しているところが違うということになります。

たとえば、文学部のなかで行なわれているファーストイヤー・セミナーなどで、たとえば文化史学という歴史系をとってみますと、もっとも大事なのは、スタディ・スキル系のなかの文献の読み方になります。あるいは、文献的読み方に基づいたレポートの書き方などが大事になってまいります。そうすると、専門教育への導入ということが非常に大事になってまいります。

もう1つは、商学部が行なっている初年次教育は、アカデミックリテラシーとビジネストピックスというようになっておりますが、キャリアデザインというのが意識されたものが、ビジネストピックスになってまいります。そのように、ずいぶん違っておりますが、基本的には組合せが大事になってきております。スタディ・スキル系、スチューデント・スキル系、オリエンテーションやガイダンスなど。

そしてまた、教養ゼミや総合演習など、学びへの導入を目的とするものは、国立系で多い、共通教育センターなどが提供している科目になります。

【パワーポイント17－初年次教育の実施状況(領域別)】

ではこれが、どのように実施されているか、されていないかというところを見てみます。オリエンテーションやガイダンスはちよつと置いておきます。情報リテラシー、スタディ・スキル系などは、実施されているところは、国公私立ともに多い。専門教育などもそうです。

一方で少ないのは、スチューデント・スキル系、自校教育。ただ、スチューデント・スキル系は、ソーシャル・スキルとか、スチューデント・スキル、交流の仕方。最近では薬物の問題などもこちらに入ってくるでしょう。それからマナーなども入ってまいります。そういうところがございます。

【パワーポイント18－正課内外での実施状況(領域別)】

正課内、正課外でというように見てみたものが次の図です。当然ながら、スタディ・スキル系、専門教育への導入、教養ゼミや総合演習、情報リテラシーなどは、正課内の普通のカリキュラムのなかで行なわれている。一方で、正課外でやるものとしては、スチューデント・スキル系やキャリアデザインなども半々ぐらいであり、オリエンテーションやガイダンスなどは、正課外になっているかと思えます。

ですから、この組合せも自由でありまして、スチューデント・スキル系などで、心の問題なども扱う場合、これなどはたぶん正課内というよりは、正課外で専門的に対処していただいたほうがよいでしょう。おそらく薬物の問題なども、正課外のほうがいいかと思えます。

先日、私どもの学長を含め、関関同立4大学の学長が共同で、薬物に対しての啓蒙とか、学生の支援を行なっていくことを発表されました。それなどは、正課内ではなくて、正課外で行なっていくことになるかと思っています。

【パワーポイント19－調査から見える初年次教育の進展】

さて、そうすると基本的にいま、スタディ・スキル系や情報リテラシー、専門教育への導入といった内容は、初年次教育の内容としてほぼ、全国的に定着しているということになります。ですから、大阪商業大学で基礎演習をされているということは、たぶんこちらにスタディ・スキルあるいは専門への導入といったものを組み合わせて、基礎演習などをつくっておられると思いますが、全国的な動向と同じようなところで取り組まれているのかなという感じがいたします。それに、どのようにキャリアデザインなどを組み合わせていくかとか、ソーシャル・スキル系のスチューデント・スキルをどう入れていくかということも、意識して組み合わせていかれば、という感じでございます。

【パワーポイント20－初年次教育の効果の検証】

次に、これは効果の話です。効果というのは結構むずかしいところです。

特徴のある初年次教育を導入している大学というのが、実は2003年に沢山ございました。そのなかで、とりわけ特徴的な初年次教育を行なっている大学を対象に、その中身について効果を聞いてみたときの回答有効数が1,632ということです。

【パワーポイント21－学習スキル関連の自己評価】

この結果を見ますと、初年次教育で重要視されている内容について聞いているのですが、学習スキル関連の項目で見ると、受講前評価が低くて大きく改善されたと学生が答えているのは、形式的なレポートの作成やプレゼンテーション技能になります。この形式的というのは、実際の中身ではなくて、たとえば引用の仕方であるとか、参考文献の書き方であるとか、そういうところなんです。そういうものは、受講前に、ほとんどの学生さんたちはできていなかったにも関わらず、改善されたと答えています。受講前評価が低くなくても、改善されたとして、図書館の活用とか、PCの操作があります。技能系の項目は達成感が高いので、やはり基礎演習のなかで、こうしたことを組み入れると、学生たちの自己評価も高くなるし、やる気が出るといいでしょうか、そこに結びつけやすいかなというところがあると思います。

一方で、改善されないという答えの多かった項目。これが先ほどの2年次、3年次、4年次にぜひつけていくことが必要だという理由でもありますが、大学教育の根幹であるクリティカル・シンキングと言いましょか、根拠ある批判力とか、課題解決力といったよ

うなところは、あまり改善されません。言い換えれば、論理的スキルの獲得は達成感も低い。また、1年生だけではとても達成できませんので、2年次、3年次、4年次と、カリキュラム全部のなかで育成するようにつくりあげていくことが必要ということになります。

【パワーポイント 22－学生資質の修得】

次に学生が、どんな側面で、初年次教育を受けて役に立ったかを聞いた結果です。

そうすると、「役に立った」「やや役に立った」というところだけを見ていきますと、「多様なものの見方にふれる」「社会問題への関心をもつ」「探究心をもつ」といったところがベスト3になります。あと、「一般常識を身につける」「大学生であるという自覚をもつ」「批判的精神をもつ」「大学生活での目的目標の設定」「学問に対する動機づけ」「職業や進路選択の方向づけ」といったところも、役に立ったというように答えていますので、おそらくこういうところを意識したかたちで、内容を組み入れていくと、よろしいのかなという感じがします。

一方で、「リーダーシップを発揮する」について、企業や社会からはリーダーシップというものが学生に求められているようですが、これはなかなか難しいところでもあります。つまり、中等教育との接続性が、この部分に関してはほとんどございませんので、やはり大学生になっても、このあたりはなかなか育成することが難しいということになるかと思えます。

【パワーポイント 23－授業形態・指導方法への評価】

次は方法です。どんなところを学生が、役に立ったと答えているかをみました。もっとも高いのは、2つ。「教員による講義」と「学生によるプレゼンテーション」です。初年次教育も、学生だけを主体にするのではやはりだめで、そのなかに教員がある程度、講義する部分を入れてあげるといいのかなということになります。

さらに、次の2つにも注目していただきたい。初年次教育では、しんどいかもしれませんが、「定期的な課題提出」をさせるほうがいいのかということです。それは学生もやはり、役に立ったと答えています。また、これは大変でありますけれども、できれば「課題提出物の添削と返却」なども行なうといいかなということでございます。

ただ、それはここが肝心であります。私どもの大学では、TA(大学院生の授業助手)を使っています。TAを使うことで、学生が「役に立った」というように見るのは、グループ・ディスカッションのところですが、TAが参加することで、より活発になったり、あるいは課題提出物の添削にTAを使うことも大切であります。ただ、大学院生が少ない場合、どうするかということも大きな課題です。たとえば私どもの大学で、私が所属している社会学部は、大学院生も結構おります。また、学科別になっていますので、学科に対してのTAを使う比率は高くなります。しかし、大規模学部、私どもの法学部や経済学部や商学部などでは、学生数に比べて、大学院生の数は微々たるものですから、TAが使えない。そういうときに、初年次教育を受けた上級生、2年生以上をSA(上級生の授業助手)として使います。SAとして使うことで、SA自体が成長しますし、学生にとっても良い効果を生みだすこととなります。ただし、この場合に大事なのは、SAができる範囲をしっかりと規定しておくことです。たとえばSAに添削などをさせては、当然、うまくいかないでしょうし、それは不適切な場合もございます。たとえばディスカッションのなかで、どのようにSAがリーダーシップをとるか、助言をするかということがあります。あるいはSAがしてはいけないこととして、たとえばこういう科目を取ったら単位に結びつくとか、楽勝科目とか、難しい科目、そういうことには触れてはいけないというような、1つのルールみたいなものも明らかにしておくことが必要かと思えます。ただ、SAも、私どもの大学ではできておりませんけれども、立命館大学などでは、SAを、オリターとか、専門の名前で呼んでいますけれども、SAになることによって、それと関連した科目を取って、単位に結びつけているところもございませぬ。そういうように、単位とSAを結びつけることによって、初年次生にとってもSAにとってもお互いに、より教育効果が高まることあり得るといふ事例を紹介させていただきました。

【パワーポイント 24－アウトカム・アセスメントの方法】

次に、ちょっと観点を変えさせていただきます。先ほど冒頭で、アセスメントということが求められるようになってきたと申しあげました。成果に対するアセスメントが今後、求められることになってきます。たぶん初年次教育やその後の教育効果ということに対して、アセスメントをしていかなければいけないことになってまいります。そのためには、どうするかということをご紹介させていただきます。

2つの方法がございます。まず、直接の評価。アウトカムに対するダイレクト・エビデンス。学習成果の評価になります。これは、先生方が日々行なっている科目試験とか、レポートの提出、あるいはプロジェクトの評価、ポートフォリオなども入ってきますでしょうし、卒業試験や卒業研究や卒業論文、そして分野によっては英語などというTOEICなどの標準試験であったり、簿記の試験なども、こうしたダイレクト・エビデンスである直接評価になります。これらは、いわゆる学生の成果を直接に測るということになります。これが1つ。

もう1つは間接評価です。インダイレクト・エビデンス。学習成果の評価に至るまでのプロセスを評価するのが、こちらです。たとえば学習行動であるとか、生活行動、自己認識、大学の教育プログラムへの満足度など、成果に至るまでの過程を評価する方法であります。こちらは、学生調査や卒業生調査などが典型的なものです。時期としては、入学時、1年次終了時、上級学年時、卒業後などに行なわれるものです。

実は、この2つは絶対相反するものではありません。たとえば学習成果で見たとき、要領のいい学生がいます。これはおそらく私

ども以上の年齢の人たちには当たり前かもしれませんが、大学の授業には1回だけ出て、あとは適当にノートを借りるなり、本を読むなりして、試験を受けて、優を取ったということですね。これは、学習成果の評価なのですが、実質的にはこれはプロセスがまったく見られていません。ですから、どうように学生が学んできて、その成果に至ったかが見えないので、じつは FD にもつながらないのです。

一方で、インダイレクト・エビデンスの学習行動のなかで、学生が、たとえば1週間に授業以外でどれだけ学習しているか、というような項目について聞きます。そうすると、単位の実質化がわかってまいります。残念なことに、日本の学生さんは、私どもの全国調査でみても、1日の平均学習時間はゼロという学生が結構います。理系を含めても、40分～1時間前後になってくるので、とてもこれは外に出せないのですが、単位の実質化からいうと、1単位45時間ということを考えますと、1日にやはり2～3時間学習していなければむずかしい。それに加えて、たくさんの科目を取りすぎているから、当然ながら、単位の実質化なんかできていない。そうすると、これはいったい何かということにもなりますので、学習プロセスの評価をすることが、非常に大切です。

もう1つは満足度。これは、満足度が高いから学習成果があがっているかというようなことを言えるかということです。つねづね、私ども高等教育の分野でも言われるのですが、この分野でたくさんの専攻の研究蓄積があるアメリカでの例を言いますと、学習成果、直接評価という標準試験などの高い学生と、教育の満足度あるいは自己評価の高い学生たちとのあいだの相関は、非常に高いものがあるという研究蓄積がいっぱいあります。

そうなってまいりますと、これら直接評価と間接評価を効果的に組み合わせることが、おそらくラーニング・アセスメントでは大事になってくるということになります。

【パワーポイント 25—アウトカム・アセスメントの効果】

これをモデル化したものが、こちらです。直接評価、間接評価は、決して相反するものではないということになりまして、評価が連携していない場合には、バラバラで行なわれます(左図)。プログラム評価というのは、たとえば教育のプログラムを外部評価委員に見ていただく、あるいは自己点検評価報告書などを、大学の評価機構などで見ていただくというようなことになります。この直接評価、間接評価、プログラム評価の3つがうまく連携していると、この部分(右図・重なる部分)がどんどん大きくなってきて、学生の教育効果が現われやすいというモデルになります。

【パワーポイント 26—総合的な教育力のためには】

そこで、総合的な教育力のためには、ということをご紹介します。

まず、教育目標を明確化することが大切です。各大学で教職員、学生が教育目標の明確化したものを共有すること。

次に、教育内容の改善。相対的に個別科目が改善された総和は教育内容の改善になりますけれども、いままでの私ども教員はどちらかというと、「何を教えるか」だったと思います。教員主導で、こういう科目で、こういうことを教える、と。しかし、これからは、先ほどのアウトカム・アセスメントのようなことになるということは、「何ができるようになるか」、あるいは「何をできるようにするか」という視点が必要になってくるということになります。

そうすると、教育の意味の認識と教育方法の改善ということが、次に必要になります。何を教えるかということは、学生に任せておけばいい。こちらは教えっ放しで、あとは学生が自学、自習していただければということで、学生に下駄を預ければよかったですけれども、今度は、何をできるようにするかになってくると、ティーチングだけでなく、じつはラーニングとティーチングの相互作用で初めて効果があるという認識をもたなければならなくなります。

そうすると、いろいろな教育方法を活用することが必要になってきます。たとえば、何を教えるかという典型的なのは、講義形式ですし、これは絶対に大切です。学生主体の、学生参加ばかりを大事にしても、全然だめなのです。当然ながら、知識を主体とした部分も大切で、そこを学生が学ぶためにも、その知識主体のトラディショナルなラーニングスタイルも大切でありまして、それに学生参加や体験やサービスラーニングなどの、アクティブ・ラーニング(Active Learning)方式を組み合わせることで、何ができるようになるか、というようにしていかなければならなくなっているということです。

【パワーポイント 27—初年次教育の評価には？】

先ほど、ダイレクト・アセスメントということを紹介させていただきました。初年次教育の評価で、たとえばダイレクト・アセスメントには何があるかという、ポートフォリオをつくらせるとか、テストであるとか、レポートであるとか、そういうこともダイレクト・アセスメントとしては考えられます。ただ、ポートフォリオは、おそらく先生も学生さんも大変なので、これを入れたとしても、音を上げていく場合が結構ある。私なんかできないなと思っているので、していません。時間がかかるし、大変だということです。

もう1つ、インダイレクト・アセスメントの代表的な方法は、学生調査です。

ダイレクト・アセスメントは各先生方が、テストはあまり初年次教育には合わないもので、レポートや頻繁な課題を提出させるということを行なっていると思います。

さらに、大学全体で行なっているのが、インダイレクト・アセスメントでございます。私どもの大学では、これを使っております。授業評価。教員の FD プラス学生への効果を組み合わせるなども、常時行なっている場合もあります。同志社もこの授業評価を行なっておりますが、より学生調査と授業評価を組み合わせ使っているのが商学部でございます。私どもの商学部では、授業評価

はすべて、ファーストイヤー・セミナーにおいては担当している教員別に平均点から全部出して、公開制をとっています。それにキャンパスライフ・アンケート調査という、全学のインダイレクト・アセスメントに加えて、商学部独自で学生調査なども行なって、解析しています。

【パワーポイント 28－初年次教育評価】

たとえば、初年次教育評価のアウトカム評価の一部として、キャンパスライフ・アンケートも使っておりますが、このなかで聞いていることは何かといいますと、「初年次教育を通じて身についたことは？」「初年次教育のコンテンツで役に立ったことは？」「初年次教育の方法（ペダゴジー）で効果的なものは？」。それから、「学生の学習習慣は？」、「学生の大学生活への適応度は？」といったところを、自己評価のかたちで聞いております。

【パワーポイント 29－同志社大学の事例】

2006 年度生が1年次終了時に伸びた項目を調査した結果です。やはり先ほどの全国調査と同じで、レポートを書くとか、パソコンを使っての資料作製力とか、インターネット・図書館の利用方法という技能系がやはり評価が高くなっていて、主張できる力、ものごとを見る力、批判する力、課題の解決力、問題の発見力など、論理的な項目はやはり低いということがわかります。

【パワーポイント 30－初年次だけでの評価だけでは不十分】

そこで、初年次だけの評価では不十分ということで、初年次と上級学年の接続をチェックする必要性というものが生まれてまいります。これは2年次、3年次、4年次で継続性が必要ということに対応している部分でございます。初年次プログラムが適切であったのか。初年次で測った学生の学習習慣は改善されたのか。初年次教育と上級学年での教育課程、プログラムに連続性があるのか。あるいは、全体のカリキュラムマップのなかで、初年次教育がちゃんと位置づけられていて、その後のカリキュラムマップにちゃんとつながっているのか。あるいは教員は初年次の学生の特徴を把握して、2年次、3年次、4年次で教育しているのか。そのようなことを聞く必要がございます。

【パワーポイント 31－大学が陥りやすいワナ】

大学が陥りやすいワナというのを紹介しておきます。これは、どちらかというと威信の高い大学で行なわれていることで、初年次教育で完結で、あとは学生の自学自習というようなことを言います。だから、要するに学生に任せておこうということなのですが、実際には、少数の学生のみが自学自習を日常化しているということがあります。

ただ、一方で、実は少数の学生にもっとも効果があるのが、初年次教育でもあります。つまり、初年次教育は底上げ機能なのか、あるいは中間層を伸ばしているのか、それともよくできる学生を伸ばしているのか、こういう議論になります。

私がいままで、2004 年から同志社で見えてきたときに、底上げについてはあまり機能を果たしてなくて、真ん中以上です。真ん中と、よくできる学生にも初年次教育の効果はあります。ただ、大学の悪いところというのは、これは日本の大学の全体的な欠点ですけれども、よくできる学生を伸ばすシステムになっていない。ですから、初年次教育の多様化というときに、実は私が申しあげたいのは、初年次教育によって、よくできる学生を、さらに伸ばすようなシステムを大学ではつくっていかねばならないと思っています。いわゆる「オーナーズ型」の学生を伸ばすシステム。

これに踏み込んだところは、たとえば東北大学です。東北大学の初年次セミナーは、最初からよくできる学生を、早くから大学院に動機づけるような初年次教育に特化しておられます。一方で、底上げはどうかというときにむずかしいのは、やはり初年次教育をしてもだめな学生は溜まっていきます。そこは判断ですね。だから私どもの大学でも必ず、底上げができない学生が絶対に何パーセントかおられますけれども、もうこれは手取り足取り、それこそ教員が1人で、面倒をみるといって、責任をもって見てあげるようなことをしなければだめかなと思っています。そこはやはり、判断だろうなとも思います。中間以上には、やはり効果があるなとも思います。

学習習慣や生活適応については、2年次も重要であることを認識して、初年次教育を提供するというのが鍵かなというところがあります。

【パワーポイント 32－同志社大学の事例】

これは、私ども同志社の学生を3年次終了時について、こちらは大学全体でカリキュラムを通じて育成すべき項目ということも入れて、聞いております。

そうするとやはり、専攻分野や学科の知識については比較的、学生たちは「伸びた」と言っています。あるいは問題点の発見力とか、リーダーシップ。初年次では低かったこと。あるいはプレゼンテーション力なども、3年まででしたら、伸びていきます。

一方で、私どもの大学の大きな課題は語学力です。語学力は3年経ったら、逆に下がっているようなところがありますので、国際化がいわれている、グローバル化ということに、日本の大学も対応していかなければならない時代ですので、これをどうしていくかが大きな課題として、突きつけられているところです。

【パワーポイント 33－初年次教育評価をどう学士課程教育に活かすか】

次に、初年次教育の評価をどう学士課程教育に活かすかということでございます。この評価を私どもは教育開発センターで、全学生を対象に、1年次終了時、3年次終了時に行なっています。これらを各専攻、学科、学部ごとに結果を集計して分析してフィードバックしています。これは、必要であれば、学科、学部を対象に説明することも行なっています。押しかけ FD あるいは、招

待 FD ということで、いままで経済学部や社会学部に行なっていました。

実はそのデータについて、全体のデータは必ず公表するというので、ホームページに全部あげております。そのホームページでは、全体データしか見られませんが、報告書には、各専攻、学科ごとの差が出ておりますので、それを見て、たとえばベンチマークができますね。うちの大学でいえば、経済学部と商学部は必ず、いつも意識合っています。それを見て、学部の改善などに活かしておられます。もっともそれをうまくしてこられたのが、やはり私どもの大学では商学部です。

先日も、商学部が「特色 GP(特色ある大学教育支援プログラム)」で、初年次教育で採択されたので、東京でシンポジウムがありまして、私も行かせていただきました。そこで商学部の先生が、自分のところで行なっている分析結果を出されました。4年間のあいだで、その分析を活かして、教育改善にうまくつなげてこられたということがよくわかりました。

言い換えれば、私たちはデータを返して差し上げているのですけれども、それを独自に分析された、いわゆる機関研究調査をされているということになります。これをすると強みがあります。やはりそれをしている学部としていない学部とでは、学生への反映が全然、異なってきます。そうすると、やはり商学部の学生は、最近では、初年次教育を受けてよかったというような回答をするところが多くなっていますし、その効果が徐々に現われてきているように思います。GPA などにも反映されるようになってきています。

もう1つ、学生もアクセスできるように、ということも大事です。私どもの教育開発センターで、キャンパスライフ・アンケート調査を行なおうとした 2004 年には、大学の学部からの反対がありました。「学生はいい加減に評価するんじゃないかな」と言われたのですね。「そんなに信用していいのか」というご批判を受けました。たしかに 2004 年は、「この調査は長すぎる」「こういうことをして実際に大学は活かしてくれるのか」という否定的な意見がありました。1ばかり付けている、あるいは5ばかり付けている、あるいは真ん中ばかり付けている、という学生さんたちも結構いました。

ところが、そのデータを毎年、ホームページにアップして、学生がアクセスするようになりますと、学生のあいだに評価文化が醸成されてきました。この点は、絶対に大事なところですよ。つまり、学生も、大学がこうしたものを教育に反映してくれている、そして自分たちも大切な評価の主体者である、というような文化が生まれてまいります。

そこで昨年度ぐらいからようやく、自由回答のほうに、学生たちの前向きな意見が目立つようになってまいりました。ですから、ここは大学がどう学生を見るかということにかかってきますけれども、やはり学生のあいだに評価文化がつくられていくことは、大学の教育改善につながる、1つの大きな要素かなと思っています。

学生調査の見直しなども行なっていくということで、PDCA を常態化するということが大切であるというふうになります。

【パワーポイント 34—PDCA サイクルの継続・改善に向けて】

最後に PDCA サイクルの継続や改善に向けてということです。

教室内の学生の成長過程を確認するというのは、最小単位です。これは各先生が行なうことになります。

プログラム評価は、たとえば経済学部、あるいは商学部といったような、教学全体あるいは大学全体のプログラムで見るということで、より大きな単位であるということになります。また学生評価については、個別の部局、大学全体というように、何段階にも分けて評価をしていくことも必要であります。

それに教員による FD 研修会などを開催する。個々の部局でのフィードバックの実際と教育プログラムの改善へ、というようにつなげていく。

そして、大学全体での PDCA サイクルへとつなげていくのが、理想的なカタチであるかなと思うところですが、ここに至るまでには、紆余曲折、いろいろな仕掛けが要るので、なかなかむずかしいところかなと思います。

【パワーポイント 35—最後に】

最後に、初年次教育学会が設立されて、2008 年 11 月 29 日、30 日に、第1回の大会を玉川大学において開催いたしました。

これをちょっと宣伝させていただきたいと思います。初年次教育学会には実は、機関会員という制度がございます。機関会員に入ると、5人までが学会に出席できます。そしてまた、初年次教育は、実は多様化していると申しあげましたので、たとえばフリーランクの大学における初年次教育、そして大規模大学における初年次教育、そして理系大学における初年次教育、これらはパターンがずいぶん違ってまいります。そういうところの情報交換が実は必要であり、ワークショップなども必要でありますので、私どもの学会は、単に発表ということではなくて、ワークショップなども提供していきたいと考えておりますし、情報交換も大切にしたい。5人まで参加できるということは、毎年5人をかえていくと、立派な FD になるということで、それを使っただけならばということで、ご紹介させていただきました。

どうも静聴ありがとうございました。

—(拍手)—

◎司会 山田先生、ありがとうございました。

最後にご宣伝いただきまして(笑)。初年次教育を、非常に幅広い分析からお話しいただき、大変参考になったと思います。

□質疑応答

◎司会 残り時間、15分ないし20分程度ですが、質問をいただけたらと思います。

最初に、基本的なところで、全体に関わるような質問を1つ2つ、いただけたらと思いますが、いかがでございますか。何か、日ごろお感じになるようなことから、具体的なことでも結構でございます。

○A 先ほど、中退率の話をされました。また、難易度と教育方法の違いのデータも見られましたが、退学率と難易度のデータをもしお持ちでしたら、その相関関係について教えていただきたいと思います。

●山田 いまは持っていないのですけれども、その相関のパーセンテージを出そうと思えば、出すことはできます。ただ、公表してきたのは、難易度と卒業率でとっているのですけれども、卒業率というのを出すのはちょっとはばかられましたので、出してはおりません。

代わりに、学部系統で出しています。それを若干ご紹介させていただきますと、中退率ではないのですが、卒業率が80%以下のところがあって、理工系、工学系とじつは社会科学系、経済系などでございました。一方で、文系等は90%以上という卒業率が出ています。やはり先ほどの初年次教育の普及で、2001年なのでなんともいえないところもありますけれども、2001年に社会科学系で初年次教育が高かったというのと同じように、初年次教育の普及している社会科学系の卒業率は、文学部系統、あるいは芸術系統に比べると低いということが見えております。

◎司会 よろしいですか。

○A 中退率との相関は調べられなかったんですね。

●山田 すみません。中退率、そこまでは見ておりませんでした。

◎司会 そうでしたら、B先生、ご質問をどうぞ。

○B おっしゃってくださいと言われましても(笑)。感情的なことがいっぱい入ってくるので、なかなか言いづらいのですけれども。

初年次教育について、非常にたくさんのデータなどをご紹介いただきまして、本当にありがとうございます。自分が取り組もうとしていることが、それを聞いて、個人的限界なのかなとちょっと思っていましたので、ずいぶん自信をつけさせていただき、ありがとうございます。

そのなかで、1つだけ、質問させていただきたいのですけれども。初年次教育の必要性は皆さん、わかっている。だけれども、じゃあ何を取り入れたらいいのかについて、なかなか意見がまとまらないということがあります。同志社の場合は、それをどのように、解決していらっしゃるのでしょうか。

●山田 同志社には学部がたくさんございまして、1年生が6,000人おりますので、非常にやはり、これはむずかしいところなのですけれども、いわゆるファーストイヤー・セミナーというかたちで提供してきています。その場合、何に重点を置いているかということ、2004年から初年次教育を全学的に広めていこうということにしたときに、1年間は全学に広めるまでの啓蒙期間としました。啓蒙期間としたのは、なぜそういうことをしたかということ、いきなりというのがなかなか難しかったからです。先行した学部と学科があったんですね。

たとえば、政策学部は2004年につくられた学部でしたので、ここで初年次教育の包括的な科目が5科目ありました。いまは整理されて3科目に減りましたけれども。当時の5科目の内容は、アカデミックピックス、それを日本語と英語というようにしていたのと、プレゼンテーション、それからファーストイヤー・エキスペリエンス。これで4科目。2年生の春学期に1科目、セカンドイヤー・オリエンテーション。以上の5科目で完成という、包括的な初年次教育のカリキュラムがつくられていました。そのなかで、たとえばファーストイヤー・エキスペリエンスというのは、徹底的に学生同士が共同学習ができるようにというチームワークとコミュニティーづくりに特化しておられたようです。

私の属している教育文化学科では、ファーストイヤー・セミナーは、教育という要素を入れたスタディ・スキルとプレゼンテーション。レポートの書き方、プレゼンテーション、図書館の使い方、そしてチームワーク、ディスカッション、というようなかたちでやってきました。

これをもとに、1年間、準備期間をおきまして、他の学部や学科でどういうことをしているかということ、吸い上げました。シラバスなどを集めまして、次の年に全学のモデルを立てたんですね。これは、本教育開発センターのホームページに入ってくださいますと、見られると思います。そのなかで、いろいろな項目を入れてあります。ただし、それは先ほど申しあげたように、学科によってずいぶん違ってまいります。ですから、たとえばキャリアに関して、非常に重要視するような商学部であれば、その部分が重要になってまいります。文献読解みたいなのところが大事なところは、そうなっています。その重点的な部分はそれぞれに任せて、だいたいこういうものを入れていただきたいというのを(全学のモデルに)入れました。

そこで、教育文化学科は、いま3クラスで行なっているのですけれども、シラバスは全部いっしょにしている、毎回、授業を同じ時間に行なっていますので、担当する教員が事前に打合せをする。それからTAが必ず3人、1クラスに1人ずつおりますので、事前に打合せをして臨むというかたちで、統一性を図っています。

最後に、授業評価をしてということで、バラツキがないようにということを行なっています。教科書は使っていません。

OB ありがとうございます。

◎司会 他に、いかがでしょうか。ちなみに、私は、今日非常に高く評価していただいた商学部の卒業生でございます。思い出してみますと、私が1年生のときには、必修科目として4つありました。そのなかに、一般演習という科目があって、それが初年次教育的要素をもっていたと思います。ただ、ファーストイヤー・セミナー的な指導も一切ございませんでしたので、大変驚きました。

なぜ、そういうふうに劇的に変わったのか。その背景がもし、おわかりになれば、伺いたい。

それから、具体的な取り組みで、アカデミックリテラシー、ビジネスピックス、これはどんなことをしているのか、ご紹介いただけますか。

●山田 商学部の導入教育の報告書をお持ちすればいちばんよかったですけれども、今日は持ってきておりませんから、また先生にお送りいたします。お送りするというか、商学部のほうから、送るようにさせます。

それで、やはり背景としては、商学部の先生方に危機感がすごくあったのではないかと思います。

◎司会 じゃあ、あとの具体的な取り組みの話をお願いします。

●山田 そうですね。

やはり取り組みの背景について少し申しあげると、経済学部と比べたときに、商学部はもっと頑張らなきゃという危機感を、皆さんが共有されたのだと思います。

そしてまた、うまいことに、学部長のリーダーシップで…、たまたま大学が教員を増やさなければいけないというときに、教員枠をみんなもらったんです。それを任期付教員にしたのですが、商学部は全部、ファーストイヤー関係、つまり導入教育科目を担当する先生方にそれを割りあてたのです。

◎司会 それは、新採の先生方で、しかも専門分野をおもちの方に、ファーストイヤー教育を担当させる、ということですか。

●山田 そうです。だから、専門分野はみんな商学系の先生です。ファーストイヤー・セミナー、アカデミックリテラシーとビジネスピックスをもつということで、採用されました。

そうすると、それが1つの大きなきっかけだったと思いますけれども、そういう先生方ですから当然、一所懸命、されますよね。その授業評価を全部、公開した。そうして次に、科目運営委員会というのをつくりだされて、その科目運営委員会は専任の先生が別途でされたのですけれども、その先生方が科目運営委員会で、任期付教員の先生方に、授業の運営方法などを紹介してもらい、全員がFD研修として携わるようになったんです。そういうなかで、専任の先生たちも、当初は、2004年にはたった4クラスから始めて、2008年には全員が取れるようにまで、30数クラスにまで広げていった。そういうかたちです。それが大きかったと思います。

中身は、レポートの書き方とか、スタディ・スキル系にしているんじゃないかなと思います。ビジネスピックスは、やはり業界の工場見学とか、そういうものが主であると聞いております。

◎司会 あと1つ、2つで終わりたいと思いますが、いかがでしょうか。ご自由に、ご発言いただけたら、よろしいと思いますが。どうぞ、C先生。

OC 最近、学力試験を経ない入試で入ってくる人たちが、ちょっと問題になっているようですけれども、そういう入試制度による違いみたいなものについて、データか何かありますでしょうか。

●山田 これは当然ながら、キャンパスライフ・アンケート調査の中で聞いています。単位の取得率とかGPAとの関係ですね。そうすると、1つはやはり、一般入試を受けてきた学生のほうがスムーズにいつているともいえると思いますけれども、AOに関しては、そんなに悪くはないというデータが出ています。

ただ、どうしてもスポーツ推薦で入学してきた学生たちは、単位取得率やGPAは低い傾向がございます。このあたりをどうするかは、大学としての大きな課題かなと思います。

いままでは、全部、学生に任せてきて、特別に何もしてこなかったのですけれども、それがいつまで通用するのかなと、私個人的には思っておりますけれども、やはり多くの先生方は、いままでどおり、「なせば成る」というようなアプローチでおられる先生も多いと思います。

◎司会 時間があと5分くらいになりましたので、最後の質問ということで。

じゃあ指名して恐縮ですが、D先生、何かご発言いただけますでしょうか。お願いします。

OD 非常に興味深いご講演をいただきまして、ありがとうございました。

私、伺ったなかでは、いま少しお話がありましたけれども、TAとSAの問題に非常に関心があります。本学の場合は、院生が非常に少ない。先ほど、上級生によるSAのお話も少しありましたけれども、具体的な役割はやはりはっきりと明確に絞ったほうがいいということなのですが、そのあたりの事例が他大学であれば、もう少しご紹介いただければと思います。

●山田 SAに関しましては、私どもの大学では、教育開発センターでSAの基準みたいなものをつくって、「できること」というのを全部挙げています。ただ、これももう少し、事務的なことだけではなくて、結構、学生が共に学ぶということ、いま、相互チュータリング制というのが非常に大切になってきておりますので、もっと積極的にしようということを考えています。

実際に、私どもの社会学部の事例をご紹介します。初年次教育だけに限っているわけではないのですけれども、相互チュータリ

ング制による創造的学力を育成しようということで、卒業研究に対して、4年生が3年生などの卒業研究、まだ早い時期のゼミなどに、学部を超えてアドバイスをしていくというようなことを取り入れるようにしました。その場合、何をするか。1つは、学生がゼミで、いままで縦のなかで行なっていますよね。たとえば4年生と3年生。それを学部・学科を超えたかたちで報告会をして、そこで4年生が3年生、あるいは4年生同士で、卒業研究とかゼミの発表などにコメントをするとか、そういうことをする。それは、大学院生も共に関わってということで、大学院生がアドバイスをしながら4年生に伝えていき、その4年生がまた3年生に伝えるというようなかたちをとっています。それをまた、ポートフォリオに残していくって、学生の成長を図っていくという試みを今年度からしています。

初年次教育に関していえば、おそらく、ディスカッション・リーダーになる、あるいはディベートなどのコメントをする、そしてその際に、非常にうまくいってくると、学生同士が自主的に課題に対して、授業以外の時間に集まって学習をするようになります。そのときに SA が関わるようなこともできるようになってきます。それを行ったりして、授業以外でアドバイスをするとか、そういう時間をつくっています。

◎司会 よろしいでしょうか。

○D どうもありがとうございました。

◎司会 せっかくですから、もうお1人だけ。Eさん、どうぞお願いします。

○E 今日はどうもありがとうございました。2点ほど、先生にご質問したいのですけれども。

1つは、冒頭のほうで初年次教育の意味と意義という話がありました。初年次教育が大事だというのはわかったのですけれども、やはりそこから大事なものは、2年次、3年次、4年次と、どう継続させていくのか。つまり、2年次、3年次には専門教育に入っていくわけなのですけれども、それを意識したような初年次教育の中身、それを構築するべきなのかどうかというのが1点。

それともう1つ、先ほども先生のお話に出ました、GPA の問題があるのかと思います。聞くところによりますと、最近、新しく大学の設置認可を受けるとなりましたら、年間の履修単位を 50 以内におさめないといけないというようなことも、伺ったのですけれども、それと GPA との絡み。具体的に GPA が本当に有効に活用できるのかどうか。そのあたり、こうすれば成功するよという、そういう参考のご意見がありましたらお願いします。

●山田 初年次教育と専門性ということですね。これには、いろいろな考え方があってと思います。たとえば、建学の精神とか、そういう科目も初年次教育としますと、これはやはり一般的な、全学的な、共通教育のなかで設置してできると思います。ただ、先ほど言ったスタディ・スキルとか、情報リテラシーというものは、情報リテラシーというのはたぶん、いまの学生にはそれほど必要ではないと思うのですけれども、たとえばエクセルも徹底的に使うような経済系であったら、それを別に設置することも必要なのではいでしょうか。レポートの書き方とか、プレゼンテーションというのは、それぞれの学問分野に合わせたかたちで、初年次セミナーのなかでできますから、そこに専門性を入れることは可能だと思っています。そういうことでよろしいでしょうか。

GPA と単位の関係。それはどういう観点からのご質問ですか。

○E 履修単位が、先ほどあったように、学習効果をあげるために、たくさん履修させてはいけない、みたいなことがいろいろと書いてあって…。

●山田 わかりました。こちらは GPA を入れられているのですか。

○E まだ入れてないです。

●山田 入れていないのですか。GPA を入れると成績が下がります。まず間違いありません。私どもの大学でも、2004 年から GPA を入れて、最初から公開しているのですけれども、厳格な成績評価になり過ぎていて、大学全体の平均が 2.2 ぐらいなんです。2.2 というのは、日本のなかでは別にどうってことないし、GPA を入れている大学では普通なんですけれども、アメリカに留学しようとしている学生が…、GPA が、アメリカの平均が 3.3 なんです。4のなかで 3.3。ですから、足切りが 3.3 以下で切ってしまうこともありますので、3を取っていたら、上位 20% ぐらいですね。そういう学生でも行けなくなります。ということはつまり、日本で GPA を入れたのが遅いから、アメリカのように早くから入れて、成績のインフレが起こっているところには対応できないところがあります。

もう1つは、単位なんです。単位と考えたときに、やはり単位の履修率が悪い学生は、GPA も低いことは間違いありません。だから、0.49 なんていう学生がいますね。「これいったい、なに？」と見ると、8単位とか、それぐらいしか取れていない。落とすから、要するにゼロになってしまうということがあります。

ただ、GPA の場合、大事なことは、単位が多いから GPA が高いということではなくて、やはりきっちり取らせるようなシステムをつくりあげることが必要です。44 単位とか、46 単位ぐらいまでが上限かなと思うのですけれども、そのなかでちゃんと宿題を出して、それをこなさせる。そしてちゃんと GPA で 4、4 というと A ですね。3 ぐらい取れる学生にしていくことが、たぶん必要だろうと思います。

◎司会 よろしいですか。

本日は、たいへん貴重なお時間をいただき、ありがとうございました。

－ (拍手) －

●山田 ありがとうございました。

初年次教育の動向と評価

2009年3月18日
於 大阪商業大学
同志社大学 山田礼子

【パワーポイント1ー表紙】

初年次教育の普及とその背景

- 初年次教育の急速な広がり
アメリカを凌駕する勢い
- 広がり背景
 - ① 学生の変容 高等教育への進学率2008年55%超
 - ② 政策的側面の変化＝すなわち大学がより教育を重視する場へと変革させるような政策の存在
初年次教育においては2008年審議のまとめで言及
 - ③ 社会から求められる教育効果の提示
アウトカム評価導入への動きも

【パワーポイント2ー初年次教育の普及とその背景】

初年次教育の現状は？

- 初年次教育の概念が日本ではそれほど整理されていない
- 教員の認識も様々
- 実際には導入教育科目の内容も大学によって、学部によっては補習教育も含まれる
- どのような内容が教育上効果的であるかが不透明

【パワーポイント3ー初年次教育の現状は？】

初年次教育の意味と意義

- 学士課程教育の一環としての位置づけの必要性
・2年次、3年次、4年次との継続性
- 日本の大学特性に合った初年次教育
- 自大学に合ったオリジナルな初年次教育
ー建学の精神、学生の特性、学生文化

【パワーポイント4ー初年次教育の意味と意義】

日米比較の意味

- 日米の文化的、社会的背景の差と共通点の認識
- 高等教育構造の差異についての認識
- 直面している問題構造の差異、共通点の認識
- アメリカの早期の経験から応用できる部分の確認

【パワーポイント5ー日米比較の意味】

重要な学士課程教育の取り組み アメリカでの評価事例

- WASCによるUCバークレーの学士課程教育の再認証にいたっての意見
- 2003年10月に実施された訪問調査の結果から評価された学士課程教育の側面
 - ・大規模大学におけるフレッシュマン・セミナーの導入
 - ・学部段階での研究プロジェクトの導入
 - ・サービスラーニングの導入
 - ・大規模教室での教授法改善の試み

【パワーポイント6ー重要な学士課程教育の取り組み
アメリカでの評価事例】

□ 学士課程教育で改善すべき具体的事項

- 大学の核となるべき学士課程教育に注目し最優先課題とすること
- 学生の学習について。。。。学習成果の評価についても実際に測定されていくと期待する。。。。具体的にはベンチマークを設定し、教養教育の成果や、学習のプロセス、を測定するなどが期待される
- 学生の学習成果を社会に対して目に見えるように公開することを促進すべきである
等々

【パワーポイント7ー学士課程教育で改善すべき具体的事項】

評価結果からの示唆

アメリカの研究型大学においても

- 学士課程教育の重要性が指摘
- 研究センター大学においても学習成果を意識した教育目標の設定が求められている
- 学習成果の測定と結果の公表が求められるように
- 初年次教育、体験型学習の導入もより普遍的に

【パワーポイント8ー評価結果からの示唆】

2001年度全国私立大学学部長調査： 初年次教育の必要性

- 93.7%が必要と認識
(やや必要である 11.4%)
- 必要とする理由
 - 学力低下・学力格差の拡大
 - 進学目的意識・動機づけの欠如
 - ・ 上2つは回答数はほぼ同じ
 - 大学生活への不適応(不登校・留年・中退)

【パワーポイント9－2001年度全国私立大学学部長調査：
初年次教育の必要性】

初年次教育の評価

- 実施校のうち85.0%が教育効果を実感
(ややそう思う 54.6%)
- 87.6%が増強すべきと回答
(ややそう思う 22.4%)
- 45.3%が初年次教育を「大学教育に本来必要不可欠な正規の教育」と認識
(学部系統間にほとんど差異なし)

【パワーポイント13－初年次教育の評価】

教育プログラムの実際

- 授業として実施 84.3%
- 授業以外として実施 73.6%
 - オリエンテーションやガイダンスなどの学内での説明会 81.2%
 - 合宿やオリエンテーションキャンプ 42.3%
人文系にやや多い
 - チュートリアルやアドバイザー制度などの担任制度 39.1%
 - 入学前の指導・課題 34.6%
理系にやや多い
- 両方実施 66.7%

【パワーポイント10－教育プログラムの実際】

2007年度初年次教育調査

- 2007年調査
国立教育政策研究所
＋私学高等教育研究所導入教育研究グループ
「大学における初年次教育に関する調査」

実施時期 2007年12月
対象 国公立大学全1980学部
回答 1378学部(回収率:69.6%)

※ 国立 265(74.0%)、公立 105(65.6%)、
私立 1000(68.4%)、不明 8
2008年4月30日現在

【パワーポイント14－2007年度初年次教育調査】

初年次教育の科目名称

- 実施率8割の実態
↓
- ゼミナール型、基礎・概論型、情報リテラシー型が中心
- オリエンテーション型は少数
- 科目名称からは補習教育型はわずか
- 専門基礎的側面が強い

【パワーポイント11－初年次教育の科目名称】

2001年度と2007年度の比較

- 2001年は理系・社会系学部でやや多い
- 2007年は学部系統に関係なく、さらに拡大普遍化

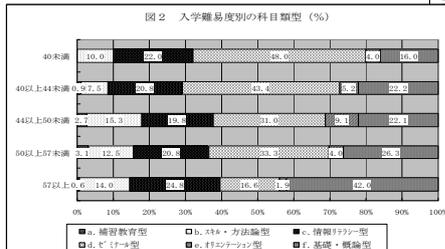
表1 初年次教育の実施率(%)

	人文系	社会系	理系	その他	計
2001年	76.1	84.9	86.7	73.2	80.9 *
2007年	96.7	96.3	98.0	96.2	97.0

*.<.05¹⁵

【パワーポイント15－2001年度と2007年度の比較】

科目類型の分布(入学難易度別)



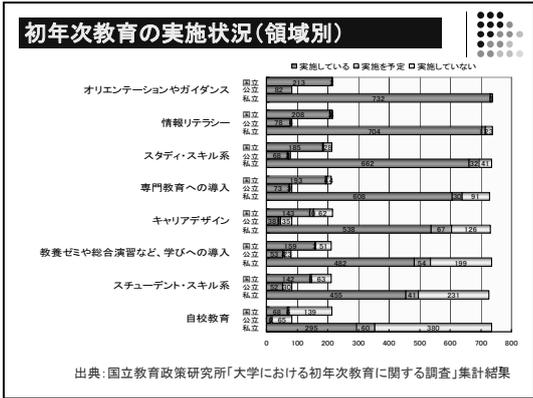
- 難易度の低い学部はゼミナール型が多い
- 難易度の高い学部は基礎・概論型が多い

【パワーポイント12－科目類型の分布(入学難易度別)】

初年次教育の領域

- ① スタディ・スキル系
(レポートの書き方、図書館の利用法、プレゼンテーション等)
- ② スチューデント・スキル系
(学生生活における時間管理や学習習慣、健康、社会生活等)
- ③ オリエンテーションやガイダンス
(フレッシュマンセミナー、履修案内、大学での学び等)
- ④ 専門教育への導入
(初歩の化学、法学入門、物理学通論、専門の基礎演習等)
- ⑤ 教養ゼミや総合演習など、学びへの導入を目的とするもの
- ⑥ 情報リテラシー
(コンピュータリテラシー、情報処理等)
- ⑦ 自校教育
(自大学の歴史や沿革、社会的役割、著名な卒業生の事績など)
- ⑧ キャリアデザイン
(将来の職業生活や進路選択への動機づけ、自己分析等)

【パワーポイント16－初年次教育の領域】

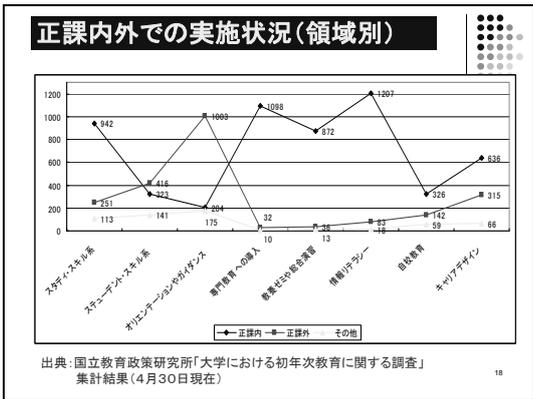


【パワーポイント 17-初年次教育の実施状況(領域別)】

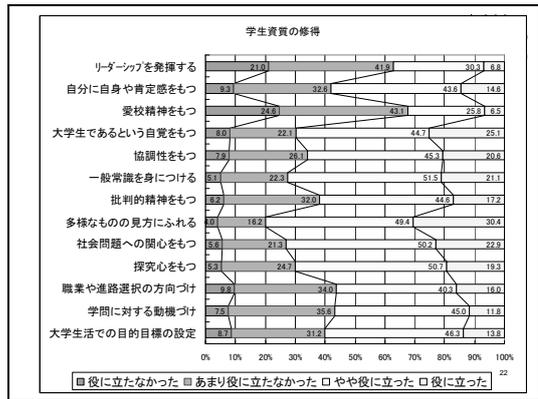
学習スキル関連の自己評価

- 改善された
 - 受講前評価が低い
 - 形式的レポート作成
 - プレゼンテーション技能
 - 受講前評価が低くない
 - 図書館活用
 - PC操作
 - 技能系項目では達成感が高い
- あまり改善されない
 - 受講前評価が低い
 - 根拠ある批判力
 - 受講前評価が低くない
 - 課題解決力
 - 講義のポイントの要約
 - 粘り強さ
 - 論理的スキルの獲得では達成感が低い

【パワーポイント 21-学習スキル関連の自己評価】



【パワーポイント 18-正課内外での実施状況(領域別)】

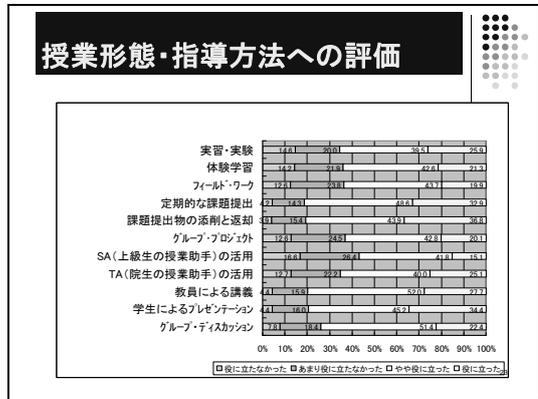


【パワーポイント 22-学生資質の修得】

調査から見える初年次教育の進展

- オリエンテーションやガイダンス、スタディ・スキル系、情報リテラシー、専門への導入は初年次教育の内容として定着
- 学びへの導入、スチューデント・スキル系、自校教育を初年次教育として位置づけている比率は下がる
- スタディ・スキル系、情報リテラシー、専門への導入、学びへの導入に加えてキャリア・デザインも正課内での初年次教育として位置づけられている

【パワーポイント 19-調査から見える初年次教育の進展】



【パワーポイント 23-授業形態・指導方法への評価】

初年次教育の効果の検証

- 2003年7月実施 前期授業の終了時
- 対象: 一年次教育プログラムを実践している授業の受講生
 - 全国の八大学で調査を実施
- 方法: 授業担当者に配布回収を依頼(全受講生対象)
- 有効回答数: 1632

【パワーポイント 20-初年次教育の効果の検証】

アウトカム・アセスメントの方法

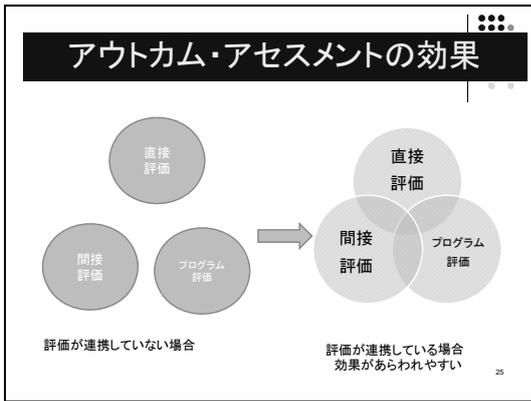
- アウトカム・アセスメント=ラーニング・アウトカムを測定するには?
- 2つの方法の存在

↓

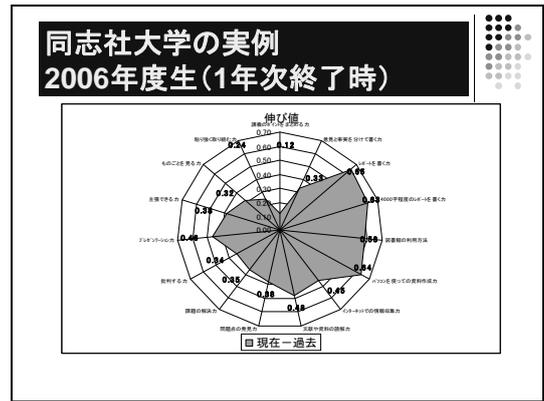
直接評価=ダイレクト・エビデンス=学習成果の評価
 内容=科目試験、レポート、プロジェクト、ポートフォリオ、卒業試験、卒業研究や卒業論文、標準試験
 分野=一般教育、専門分野別

間接評価=インダイレクト・エビデンス=学習プロセスの評価=学習行動、生活行動、自己認識、大学の教育プログラムへの満足度等成果にいたるまでの過程
 内容=学生調査、卒業生調査等
 時期=入学時、1年次終了時、上級学年時、卒業後

【パワーポイント 24-アウトカム・アセスメントの方法】



【パワーポイント 25ーアウトカム・アセスメントの効果】



【パワーポイント 29ー同志社大学の事例】

- ### 総合的な教育力のためには
- ・教育目標の明確化
各大学での教職員、学生とが共有
 - ・教育内容の改善
個別科目の改善の総和=教育内容の改善?
「何を教えるか」から「何をできるようにするか」
 - ・教育の意味の認識と教育方法の改善
 - ・ティーチングとラーニングの相互作用という認識の浸透
 - ・さまざまなペダゴジーの応用
講義形式、知識主体 Traditional Learning Style
学生参加、体験、サービスラーニング等
Active Learning方式の導入

【パワーポイント 26ー総合的な教育力のためには】

- ### 初年次だけでの評価だけでは不十分
- 初年次と上級学年の接続をチェックする必要性
- 目的
 - ー初年次プログラムは適切であったか
 - ー学生の学習習慣は改善されたか
 - ー初年次教育と上級学年での教育課程、プログラムに連続性があるのか
全体のカリキュラムマップと初年次教育の関係性
 - ー教員は初年次の学生の特徴を把握しているのか
 - ー学生の大学への適応は進んでいるのか

【パワーポイント 30ー初年次だけでの評価だけでは不十分】

- ### 初年次教育の評価には？
- ダイレクト・アセスメントには何がある？
ポートフォリオ？ ルーブリック？
テスト？レポート？
 - インダイレクト・アセスメントの代表的な方法は？
学生調査=同志社大学はこの方法を採用
授業評価=教員のFDプラス学生への効果
を組み合わせる等
- 27

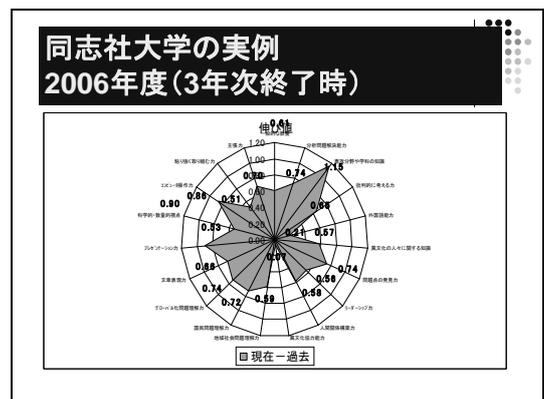
【パワーポイント 27ー初年次教育の評価には？】

- ### 大学が陥りやすいワナ
- 初年次教育で完結 あとは学生の自学自習
しかし、実際には少数の学生のみが自学自習を日常化
 - 大多数の学生には初年次教育の効果は継続されないという前提に立つことも必要
 - 学習習慣、生活適応については2年次も重要であることを認識し、初年次教育を提供する

【パワーポイント 31ー大学が陥りやすいワナ】

- ### 初年次教育評価
- アウトカム評価の一部としての学生調査の利用
 - 初年次教育を通じて身についたことは？
 - 初年次教育のコンテンツで役にたったことは？
 - 初年次教育のペダゴジーで効果的なものは？
 - 学生の学習習慣は？
 - 学生の大学生活への適応度は？
- 28

【パワーポイント 28ー初年次教育評価】



【パワーポイント 32ー同志社大学の事例】

初年次教育評価をどう学士課程教育に活かすか

- かならず結果は各専攻、学科、学部ごとに結果を集計、分析し、フィードバックすること
- 必要ならば、学科、学部を対象に説明すること
- データを学科、学部を提供し、独自に分析を
=IR(機関研究調査)の発展に
- 全体のデータは必ず公表する
学生もアクセスできるように
- 出来れば2年次、3年次と継続性があるようにカリキュラム、教育方法、学生調査の見直しをおこなうこと

PDCAを常態化すること

33

【パワーポイント 33－初年次教育評価をどう学士課程教育に活かすか】

PDCAサイクルの継続・改善に向けて

- 教室内での学生の成長過程の確認 最小単位
- プログラム評価 より大きな単位
- 学生評価 個別の部局、大学全体
- 教員によるFD研修会
- 個々の部局でのフィードバックの実際と教育プログラムの改善へ
- 大学全体でのPDCAサイクルへ

【パワーポイント 34－PDCA サイクルの継続・改善に向けて】

最後に

- 初年次教育学会の設立
- 2008年3月11日 同志社大学において
設立記念大会を開催
- 2008年11月29日、30日に第一回大会を玉川大学において開催

連絡先 ryamada@mail.doshisha.ac.jp

ご清聴ありがとうございました。

35

【パワーポイント 35－最後に】